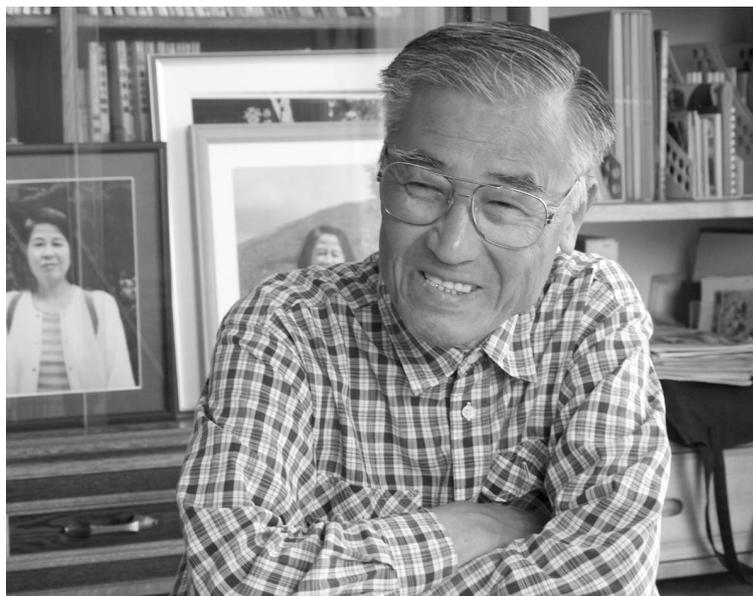


クローズアップ インタビュー



瑞宝単光章受章者 **内藤 武士氏** (73歳)

主な経歴 昭和32年4月1日 愛知県警察官を拝命
昭和34年9月26日 伊勢湾台風を警察官として経験
20歳代は主に制服勤務(交番など)
30歳から40歳代は主に捜査(刑事)勤務
50歳代は主に留置管理事務
平成7年3月31日 愛知県警察退職

平成20年春の褒章の発表があり、内藤武士さんが永年に渡り警察に勤め、地域の防犯活動に貢献。地域の安全・安心を守り続けました。喜びなどをお聞きしましたのでご紹介します。

受章の感想

褒章などには縁のないことと想っていた私が、このような褒章をいただけるのは光栄の至りです。この徽章は、永年まじめにこつこつと勤めた自分へのご褒美と思いたい大切にいたします。また、警察の特殊な勤務で家を空ける私の代わりに家を守り、苦労や心配をかけた家族には大変感謝しています。

きっかけ

私の父も警察官をしていました。小さい頃から父の背中を見て育ち、父がどんな仕事をしていただろうという少しの興味と、警察職に就きやすい時期も重なり愛知県警を志願しました。

いざ、警察に入ると法律の勉強をしたり、厳しい柔道・剣道の練習、茶道などで作法を学んだりと辛くとも楽しく警察学校で警察官としての基礎知識を学びました。

苦勞

名古屋市中村区の交番に勤務していた昭和34年には、伊勢湾台風がこの地を襲いました。私の担当していた区域は他の地域に比べ被害は軽かったが、他の区域へ応援に行くとき、そこでは地獄の様な光景を目の当たりにしました。小さなお子さんが亡くなっていたのを見たときは心が張り裂けそうでした。

地道な努力

主に捜査を担当するようになってからは、犯人逮捕のための地道な努力が必要でした。あまりテレビの刑事ドラマを見

たことはありませんが、刑事の仕事はドラマの様に華やかなものはありません。また、以前あった拳銃をもつての立てこもり事件の様な事件の前面で危険にさらされることはありませんでしたが、司法解剖などの現場に立ち会うことは多々ありました。亡くなった方に直面するのが捜査の仕事なのです。

常に事実関係、法的根拠を事件現場、特に自供は重要となるため慎重に取り調べなどにより確認し、手落ちが無いように努めました。

ひとつの事件の証拠を固め、容疑者が起訴になるなどの区切りがつくとホッと一息つけましたが、名古屋市内では事件が多く、忙しい毎日でした。

今後の歩み

私も微力ながら地域に貢献できればと思います。昨年度は町内会で理事を務めさせていただきました。

今は健康に気を使い、家庭菜園で身体を動かして野菜などを育てています。また、時々休暇村などにドライブがてら一泊で出かけてみたり、美術館や博物館に出かけたり、静かで綺麗な景色の中で心を休めています。